

「地域にねざした災害安全意識向上の取組

～地域とともに行動できる主体性の育成～

令和4年度 高知県学校安全総合支援事業（災害安全）

高知県教育委員会 拠点校 高知県立嶺北高等学校

I 本校の現状

本校は四国の中央に位置する嶺北地域唯一の高等学校である。嶺北地域は南海トラフ地震の津波による被害想定はないものの、土砂崩れやライフライン切断など、地震に対する防災・減災などの取組は必須であるとともに、周辺地域の避難所となっていることから地域と一体となった防災教育の推進が求められている。

また、中山間地域の学校として魅力化に取り組む中で入学者は嶺北地域からだけでなく、全校生徒の約25パーセントが県内及び他県からの生徒となっていることや、卒業後の進路も踏まえて防災学習を考えたとき、必要な学びは多岐に渡る。

こうしたことから、様々な実践事例や想定演習的な学びを通して、命を守るための軸となる避難の考え方や周囲との協働について実践できる考え方・実践力の養成が必要と考えられる。

II 拠点校の取組

(1) 拠点校の目標

重点的な取組として、校内防災教育推進委員会の開催や講演・研修会の実施、先進県・先進校での視察や研修を生かした防災避難訓練・講話、また「総合的な探究の時間（嶺北探究）」を中心とした教科・領域を横断した探究的な防災学習、さらに本校が避難所として有効に機能するための避難所運営の在り方等に関する研修や活動内容を、嶺北探究発表会などの機会を通して、主体的に防災に取り組む姿勢や態度、資質・能力の育成を目指す。

(2) 具体的な取組

① 「学校安全計画」、「危機管理マニュアル」の確認・共有

4月当初職員会にて確認。本校の立地的要因から、南海トラフ地震では垂直避難をすること及びそのルート、また被害想定は津波ではなく主に土砂災害であることやライフラインの切断等への備えが主になることを確認。このことは各防災避難訓練の際にも職員、生徒で確認。

② 中高合同防災訓練（第1回：4月29日／第2回：9月1日／第3回：11月10日）

本校は同居型中高連携教育校であり避難訓練、その他講演会について合同実施。

第1回 新入生を迎えての中高合同避難訓練

第2回 関連火災を想定しての中高合同避難訓練

第3回 防災意識の確認・高揚を図る中高合同避難訓練（未周知実施）

③ 311被災地視察研修（代表教員1名参加）

ア. 研修参加（宮城教育大学開催：8月10～13日）

8月10日（水）

○宮城県気仙沼市（気仙沼向陽高校遺構・伝承館）

気仙沼向陽高校遺構・伝承館を訪れ現地の語り部クラブに所属している高校生の案内で施設見学および津波の教訓を聞き津波の恐ろしさを再確認。

8月11日（木）

○岩手県釜石市（鶴住居・いのちをつなぐ未来館）

釜石の軌跡とも称された釜石市鶴住居地区を視察。事前の防災活動の取組が奇

跡ともいわれる避難につながったことから、事前訓練の重要性を再確認。

○宮城県陸前高田市

岩手県最大の犠牲者がでた被災、復興現場および国営祈念公園を視察。

○宮城県南三陸町（戸倉小学校）

当時の校長より、地震発生から避難、津波襲来、その後までを実際に避難した経路をたどりながら事前防災や様々な判断に至った理由、迫りくる津波の状況など詳細に聴取。

8月12日（金）

○宮城県石巻市(大川小学校・旧門脇小学校震災遺構)

学校管理下で最大の犠牲者がでた大川小学校を視察。大川小学校津波訴訟の詳細を聴取し、事前防災の重要性、特に防災マニュアルの作成など見直すべき事項を考える機会を得る。

○宮城県東松島市野蒜地区

体育館に津波が襲来した野蒜小学校跡地を視察。引き渡し判断の責任が問われた訴訟の内容を聞き震災発生後の対応について研修。

8月13日（土）

○宮城県仙台市（宮城教育大学・荒浜小学校遺構）

避難所運営について、実際に避難所運営に当たった教員から様子や運営マニュアル作成における留意点を聴取。マニュアルの概念を考え直す機会となる。

イ. 研修報告・防災講話（参加教員による生徒・職員への講話10月27日）

上記「ア.」の研修について図表、写真を用いて被災地訪問研修で得た学びを伝達し、必ず発生する南海トラフ地震に備え、防災意識の高揚を図り、地震等による人命及び財産の損失防止を目的として実施。

講話を聴講する姿や実施後の振り返りには、震災遺構の写真や経験者談に触れ「必ず南海トラフ地震はやって来る」ということの再認識と地震被害の大きさ、恐ろしさ、人命の尊さを再認識し、事前防災への積極的で真摯な取組こそが最大の備えであることを痛感した様子があった。

気仙沼向陽高校遺構・伝承館



釜石市編



①釜石の奇跡
・釜石市では死者、行方不明者が約1,300人にのぼった。大津波に面した陥住居(うすまい)地区は壊滅状態であったが、陥住居の小釜石東中11の児童、生徒計約570名は**全員無事**だった。同校の迅速な避難劇は「奇跡」とも言われている。

②陥住居地区防災センター
陥住居地区防災センターに避難した住民推計160名が犠牲となった。



石巻市立大川小学校



石巻市立大川小学校

子供たちは校庭で動かずにいる間に津波は北上川を4km遡上し、堤防を超えて15時37分に大川小を飲みこんだ。

地震発生から**51分**、大津波警報から**45分**の時間があった。

子供たちが移動を開始したのは津波到達の**1分前**。なぜか山ではなく、川の方角でありそのままの行き止まりの道であった。

④学校防災アドバイザー活用・防災講演会／防災教育校内研修（9月3日）

講師に高知大学防災推進センター客員教授・高知大学名誉教授の岡村眞氏をお招きし、演題を「近づく南海トラフ巨大地震～嶺北中高校通学地域でできる事前防災～」として防災講演会を実施。講演では嶺北地域の地質学的特徴とそのことに留意した避難の仕方の検討などの事前防災を学習。まずは逃げる、生きるという観点から、東日本大震災等の教訓を生かして発災時に居室で何が起り、生命の危機や避難を困難とするか等についてお話いただき、生徒たちが自分自身や家庭のことに置き換え、今日から就寝の際に

倒れてくるものがないように、またガラス等の破片があっても避難できる思考・実践者となるよう示唆をいただいた。振り返りからも確かな学びがあったことが伺えた。



愛校作業後に、中高合同開催。嶺北中学校生徒、嶺北高校生徒、保護者、教職員が参加。
コロナ禍のため高校3年生のみ対面聴講。中学校及び他学年、保護者は教室にてオンライン聴講。

講演後・振り返りシート集計(抜粋)

Q.本日の講演を聞き実践しよう思ったことがあれば教えてください。97件の回答の抜粋

- ・将来住むところは地盤や標高などを確認する(地盤のいい、標高30m以上)・寝室に物を置かない(布団の周りに落ちてくるものを置かない)・寝室はできるだけ2階に!・ガラスが少しでも飛ばないように厚いカーテンをする・扉が開くところに物を置かない⇒扉が開かなくなる可能性あり・石灰などでグラウンドなどにへりから見てわかる(1m四方に1文字くらい)メッセージを書く⇒情報がないと助けも来ない!
- 嶺北高校周辺の地形や地盤などについて詳しく知ることができ、どこでどういった被害が予想されるかなど考えることができた。また、地震発生後の対応やどういった行動が大切になってくるのかも知ることができた。
- 今日の講演で私は、南海トラフ巨大地震の危険性や本山町で起こりうる災害の種類を再確認することができました。地震が起きたとき、防災マップをすべて信じるのではなく、最後はすべて自己判断で動かないといけないことがわかりました。
- ここは津波が来ないから大丈夫なのかなと思っていただけ、川津波が発生したり土石流や地すべりがあるということを知りました。しっかりと自分の住んでいるところのハザードマップを見ておきたいです。
- どこにいても地震の際、自分で判断してすぐに動けるようにしておきたいです。
- 防災講演は何度も聞いたことがありますが、今回の講演では初めて知った内容が複数ありました。1つは川の氾濫による川の津波についてです。津波は海の近くだけ起こるもので、自分の住んでいるところは海が近くに無いので大丈夫だと思っていましたが、川の水で家が流されていく動画をみて、他人事ではないなと思いました。2つ目はダムの水についてです。早明浦ダムは地震で崩壊するものではないと知っていたので、自分の家は土砂災害だけ気をつけたら良いと思っていましたが、ダムの周りの山が崩れてダムに入り込み、ダムの水が下流を襲うという話を聞いて、とても怖くなりました。自分の家はダムの下ですぐ近くにあるので、そうなったら逃げる隙はないと思いました。新しく知ることがあった一方で、改めて考えさせられたこともあり、貴重な時間になりました。

⑤避難所運営ワークショップ(防災人権教育講演会として実施:10月20日)

講師に高知大学地域協働学部教授大槻知史氏をお招きし、演題を「避難生活の尊厳と幸せをどう護る?~避難所運営ゲーム『さすけなぶる』で考えよう~」として避難所運営に関するワークショップを実施。避難所ではプライバシーの確保など人権課題も包括した運営が求められることから、防災人権教育講演会として実施。実施概要は別のとおり。ワークショップ形式の研修は多くの生徒が初めてであり、周囲と意見交換をしつつ課題解決に向けて協働する経験は貴重なものとなった。

また、今回、嶺北中学校と合同実施とし、互いに中高生が積極的に質問する姿勢や、グループワークの共有等を通して、他者の意見からの気付きのみにとどまらず、研修に臨む他者、他校種の生徒の姿勢から、自助の次にある共助の主体として自分たちの立場を認識する機会とすることができた。



取組名称	<p>人権講演会 避難生活の尊厳と幸せをどう護る？ ～ 避難所運営ゲーム「さすけなぶる」で考えよう ～</p>
指導内容	<p>義務を果たし責任を重んずる態度及び人権を尊重し差別のないよりよい社会を実現しようとする態度を養うこと。</p>
取組のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時、地域の避難場所となっていることから、災害時における避難所で想定される課題、留意すべき事柄、避難所運営等に関して、プライバシー等の人権への配慮事項について学ぶ。 ・他者理解、自己理解。共通理解を図る際の課題。 ・よりよい環境実現のための思考。(個人、チーム、社会)
取組の内容 ※活動等 流れの 詳細	<p>講師招聘：高知大学地域協働学部教授 大槻 知史 氏 実施時間：50分（通常80-90分） 実施日：10月20日（木） 活動の流れ： I 避難所における問題・課題について（講話）</p> <div data-bbox="774 571 1348 1052" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">避難所運営ゲーム「さすけなぶる」</p> <p style="text-align: center;">避難所運営の5つのKEY</p> <p>♀「さ」 りげなく 避難している人のいろんな声に耳を傾けて、状況の改善に繋げよう。 （「大きな声」だけでなく「小さな声」「声なき声」も大切に）</p> <p>♀「ず」 ばやく 困っている（かもしれない）人の状況と課題をしっかりと把握しよう。</p> <p>♀「け」 むたがらず 避難している人同士、避難している人とお手伝いをしている人が 気軽に話したり、相談しあえる機会をつくらう。</p> <p>♀「な」 いならつなごう 難しい問題が起きてもあきらめずに、いろんな団体や専門家を頼って 問題を改善していこう。</p> <p>♀「ふる」 さどのような 避難している人自身が活躍できて、自分たちのことは自分たちで決められる 避難所になろう。</p> </div> <p>II ワークショップの導入 （ゲームの世界の説明等） 1 ゲームを理解するための 例題の実施 ・ 5つのkeyの説明 2.問題の実施 ・ 個人での検討 ・ チームでの検討 3.全体共有 ・ いくつかの班の発表 4.クロージング ・ 避難所運営の5つのkeyを「いつも」にいかそう。 ・ 避難所運営にどんな事前準備が必要か。</p>
生徒の反応や振り返りの内容等	<p>振り返りシートより</p> <p>Q あなたが今日の講演の中で最も印象に残ったことは何ですか</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 普段から人に優しくしていないといざというときに出来ない。 ○ 「公平」ではなく「公正」に、を心がけることがお互いを思いやるうえで大切だと思った。 ○ 災害時の人権問題で、日本が遅れていること。 ○ 自分だけでなく周りのことも考えること。 ○ 排除、隔離、無視、我慢の強制の例を見て心が痛くなった。 ○ 避難所でも普通の生活でも人のことを尊重することが大切。 ○ 色々な考えの人が避難所を使うということ。 ○ 自分たちのような学生でも避難所の運営に関わる必要があること。 <p>Q あなたが今日の講演を聞き「実践しよう・心がけよう」と思ったことがあれば教えてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 災害時だけでなく日頃から他者と協力すること、思いやることを大切にしていきたい。 ○ 実際に避難することがあったら、まずは自分の生命や心、気持ちを大切にすることを一番大切にしながら、協力できることがあれば積極的に動いていきたいと思いました。 ○ 避難場所で想像力を持って周りの人を気に掛ける。 ○ 日常生活からも周りに気を配ることを心がけようと思った。 ○ 問題があったときに解決できなくてもいいから周りの人と協力して考えてみる。「さ」、「ず」、「け」、「な」、「ふる」の考え方を実践できたら、いつもと違う見方ができそうだった。 ○ 避難所で地域の人たちとスペースを共有する時、絶対にいつものような生活はできないと思う。だからこそ、一人一人の思いやりや自分のことばかりにならないという多少の我慢は必要だと思った。それは、災害がおきたときだけでなく、電車の中や学校生活でも大切にできることなので、実践を心がけたい。

Q 今日の講演についての感想を聞かせてください。

- 災害時の避難生活だけではなく、日々の生活で活かせることがあると知ることが出来たので良かった。また、人と関わる時には、相手を思いやり尊重することが大切だと思った。
- 防災というのは、道德のように正解のない、考えお互いの立場を尊重することが大切なものだと思った。
- チームで話し合っって最適解を生み出すのは大変でした。
- 今回の講演を聞いて自分がよかったらいいという考えではなくみんなが過ごしやすい環境をつくるのが大事だと思う。
- 中学生との共同授業だったので高校生だけの意見以外にも聞いてよかった。
- 人権についてさまざまな視点から考えることが、重要であると感じた。
- 自分の意見とはちがう他の人の意見を聞いて、より考えが深まった。災害時でもみんなにとって居心地の良い環境にできるように自分ができることを見つきたい。
- グループワークなどもあり、自分の意見だけでなく、友だちの意見も聞きながら考えを深められました。
- ただ話を聞くことだけじゃなくて、考えたりする時間も多くあってわかりやすかったし、楽しかった。

⑥高知県高校生津波サミットへの参加（11月12日）

平成28年に黒潮町で開催された『世界津波の日』高校生サミット in 黒潮』で採択された「黒潮宣言」に基づき、高知県の未来を担っていく高校生防災リーダーの成長、活躍を目的に開催。本校からは生徒会より1名が代表参加。

東日本大震災の被災者である釜石市立釜石東中学校卒業生からの講演や黒潮町芝地区自主防災組織 防災アドバイザーによる講話のあと、県内の高校生と地域における高校生の防災活動についてグループワークを実施。これまでの取組の共有と振り返りを行い、今後の取組に生きる知見、実践を得ることができた。



⑦先進校視察：学校安全総合支援事業実践発表会視察（12月3日）



「高知県学校安全総合支援事業」（災害安全）の研究指定校である南国市立香南中学校の実践発表会を防災担当が視察。総合的な学習の時間で行っている「地域の方を守るために私たちにできること」に関する授業実践には、自主防災組織の方や地域の方の参加があり、地域や防災関係機関との連携体制の強化と充実が進んでいることを体感することができた。授業では地域の方への防災意識喚起のため作成するポスターについて地域の方にプレゼンを行い、改善点について活発にアドバイスをいただく様子が沢山あり、進んだ実践がなされていた。地域の近い、中山間に立地する本校にとっては大変参考となる実践であり、その取組に学びたい。

⑧防災意識調査（事前・5月上旬／事後・12月中旬）

生徒対象 防災教育アンケート集計（1・3学期実施）		第1回		第2回		第2回－第1回	
No.	質問事項	肯定的回答	否定的回答	肯定的回答	否定的回答	肯定的回答	否定的回答
1	あなたは南海地震について、話を聞いたり見たりしたことはありますか。	91.1	8.9	96.3	3.7	△5	▲5
2	あなたは地震が発生したとき、自分の住んでいる場所で起こる可能性のある被害について知っていますか。	80.2	19.8	87.6	12.4	△7	▲7
3	あなたは地震発生時に、家や建物の中に自分で判断して身の安全を守ることができますか。	92.1	7.9	97.6	2.4	△6	▲6
4	あなたは地震発生時に、外にいるとき自分で判断して身の安全を守ることができますか。	90.1	9.9	92.6	7.4	△3	▲3
5	学校にいるとき、あなたは地震が起きたあとに、避難する安全な場所を知っていますか。	84.1	15.9	93.9	6.1	△10	▲10
6	家にいるとき、あなたは地震が起きたあとに、避難する安全な場所を知っていますか。	82.2	17.8	84.6	15.4	△2	▲2
7	あなたが一人で登校しているとき、地震が起きたら安全な場所に避難することができますか。	83.1	16.9	81.2	18.8	▲2	△2
8	あなたは地震などで避難したあとに、家族と集合する場所を決めていますか。	46.5	53.5	53.1	46.9	△7	▲7
9	あなたは地震などで避難した後に、家族との連絡の取り方を決めていますか。	27.7	72.3	38.3	61.7	△11	▲11
10	あなた（あなたの家）は、地震に備えて準備をしていますか。	60.4	39.6	65.4	34.5	△5	▲5
11	あなたは地震発生後に、周りの人のために何かできることがありますか。	46.5	53.5	45.7	54.3	▲1	△1
12	あなたは南海トラフ地震について、もっと知りたいと思いますか。	90.1	9.9	95.1	4.9	△5	▲5

⑨嶺北探究（総合的な探究の時間）校内発表会にて防災グループ発表（11/17）



発災時に生じる思い込み（多数派同調性バイアス、正常性バイアス、楽観主義バイアス）やオオカミ少年効果などの避難行動を混乱させる要因があることを住民の方に知ってもらい、正常な避難行動を行うことで逃げ遅れを減らす取組実践について報告。

Instagramの開設、ポスター・チラシ作成、県内企業とコラボレーションによるイベント（防災教室）の開催。

⑩嶺北探究・防災グループによる防災企画／防災教室（1月9日）

総合的な探究の時間に聞き取りや危険箇所調査を進める中で、高齢者の「逃げ遅れ」問題について知識を深め、関係者の意識を高めたいとの課題意識から高齢者世代と若者世代がともに参加し学ぶ防災教室を生徒が企画し、株式会社フタガミ様及び株式会社アクトワン様の協力のもと実施。



防災教室では事前防災の理解や揺れへの対応を体験。また、高齢者が自力避難できる体力づくり・意識づくりについての実践をお聞きし、各年齢層がともに課題共有し意識を改める貴重な機会とすることができた。

（3）取組における成果と課題

生徒の振り返りから、各取組はねらいに沿った学びとなったものとする。

具体的には、防災講演会で事前防災として居室、寝室の整備が命を守ることをしっかりと理解したことや自己の生活域で想定される災害を地質図から読み取り、回避準備ができることの気付きがあったことが伺われた。また、避難所運営ワークショップでは、事例をもとにしたディスカッションを通して、日頃からの周囲との繋がり・コミュニケーションこそが「その時」に生きること、また、人権意識や道徳心、公共心が大切であるという気付きを得ることができたことが伺われる。2回実施の防災教育アンケート結果は肯定的評価の割合の上昇がみられた。また、探究学習を通して見出した課題について、生徒が主体となって地域に発信し、防災教室・講演会を開催したことは具体的な成果と考える。なお学校での各取組（教科学習、総合探究、特別活動、学校行事など）を個別の学びとしてのみではなく、全体として防災教育においても確かな学びに繋がっていることが再認識され、そのうえで個々が実施されると、個々としても全体としても更に実効あるものとなることを考える。

（4）今後の取組

今後も、まずは自助（自分の命を守る）を第一として思考、準備、行動できる主体性を育てていきたい。次に、発災時に地域の共助も担う当事者となることも想定し、地域及び中高合同でのワークショップ等、他者と協働し、体験し学ぶ機会を継続して設定していきたい。

また、うへの取組を実効あるものとするためには、防災は講演会や訓練のみの学習でその目的を達成できるものと捉えるのではなく、教科の学びや他者との関わりなど、学校生活全体・学校外での生活全体を通して、身に付け生かすものとの共通認識を学校全体で持ち続けるよう、様々な研修や機会をとおしてベクトル確認をし、続けていきたい。